

ESSAY
いたずら
倉元 信行

それだけは止めて！

研究所で材料の開発をしていると、時に重さ比べになることがある。自分のやっているものはグラムいくらで売る予定だという自慢話だ。比較によく挙げられてかわいそうなのがセメントで、これはキロ8円の世界になってしまう。よくこんな値段で作れるものだと逆に感心してしまう。半導体の原料となる高純度シリコンは量産品なのにキロ7千円以上だから大意張りだ。これとて医薬品などに比べるとかすんでしまうのだが。

20年ほど前に私たちが開発した窒化アルミというセラミックス粉末は、当初キロ4万円で売っていた。銀より高いとユーザーには文句を言われたが、それでも大赤字のスタートだった。そして今は桁落ちで苦しんでいる。

私の好きな志野焼き作家、鈴木蔵氏のお茶碗は数百万の値段がついているからキロに直せば1千円以上だ。美術品を重さでいうのは馬鹿な話だが、無茶を承知でつい色んなものを比べてみたくなる。

自分の買ったもので一番高いのは？と考えると15年程前フランクフルトの骨董屋で買ったローマングラスだろう。ローマ時代に吹きガラスの手法が発明され、一般の人たちにも硝子の容器が広まっていったが、当時のものが長い年月、地中海を取り囲む一帯の酸性の土に埋もれて風化し、まばゆいばかりの色彩に輝く貴重品に変化した。金、銀、虹色に輝くその器は直径8センチほどの小さなもので60万円だった。はかりで重さを測ってみると、風化のためにたった20グラムしかない。キロに直せばな

んと3千円だ。でも、これを鑑定団に出して偽物だといわれたらどうしよう。

ついでに絵も計ってみよう。居間に飾って楽しんでいる山下徹氏の静物画はとても心を癒される優作だ。2種類の葡萄、りんご、栗、洋ナシなどが見事な構図で精緻に描かれている。これを買ったときには一悶着あった。山下さんの個展が開かれていた横浜のS百貨店でのこと。招待状の写真に選ばれていたその絵の前で私はくぎ付けになった。他の絵を圧倒してすばらしい。絵が私に買ってくれと頼んでいる。

心を落ち着かせようといったん会場を離れ他の売り場を一回りした。そして再びその絵の前でくぎ付けとなった。

私がこのデパートのカードを手渡すとなかなか手続きをしてくれない。見ると女店員が上司らしい男性と揉めているようだ。やっと戻って来た店員は、銀行口座番号を示して、ここにお金が振り込まれたことを確認してから品物を発送すると言う。どうやら私のラフな姿を見て、怪しんでカードを使わせない魂胆だ。

頭に血の上った私はすぐさま地下の銀行キャッシャーに行き、90万円と消費税を加えた額を引き出し8階の売り場へ戻った。女店員はすまなさそうに一枚一枚数え始めた。

10号の絵は額からはずして計ると約500グラムだからキロ200万といったところか。もちろん重さの殆どは木のフレームだがこれをはずして計るわけにはいかない。

支払いのトラブルでは思い出す一コマがある。備前焼の作家I氏のお宅へ伺った時のこと。

自ら後添いですと名乗られた着物姿の奥様にお茶を点てていただいた時、お座敷の棚に飾ってあった小ぶりの徳利に目が留まった。焼き締めた黒い土肌に金色の窯変があり、その上の緋襷が美しい。この窯で2年前に求めたぐい呑みと並べると好一對になるはずだ。ちゅうちょ無く頂くことにした。

窯元を辞して時間調整に備前の町並みをぶらぶらして伊部駅に戻ってみると、なんと奥様がベンチに座っておられる。

「あう、まだ代金を戴いておりませんでしたので」

いい物を手に入れた興奮で私の頭からは支払いのことが完全に欠落していたのだ。

重さの話に戻ろう。飛行機を利用した時、時々思うことなのだが。

優に100キロはあろうかという人の隣に座ったりすると、どうしてこの人と料金が同じなのだろうかと考えてしまう。郵便や宅配便だって重さごとに段階的に料金が決められている。ジェット燃料を私の倍は使うだろうと同じだなんて。

羽田 - 福岡間は体重1キロ当たり300円とか、これほど細かく決めなくても、例えば、体重40キロ台から80キロ以上まで5段階の料金表があるととても合理的に思える。ダイエットに励んで健康になる人も増えるはずだ。

えっ、それはお前の勝手な言い分だ、給料も体重別にしようかだって？

それだけは止めてください、お願いしませう。